

ルーマニアからイタリアへの長い旅路

Júlia Sigmond

“Júlia Sigmond 90”

EXIT、2019、126p

コロナ禍による閉塞感でやりきれない日々が続いている。こんなときは、せめて少しは心がなごむ本を読みたい。そう思って、ユリア・ジグモンドさん（1929～2020）の“Júlia Sigmond 90”と題する短編集を手にとった。私は作者については全く知らなかったのだが、2020年9月に名古屋市で開催された第107回日本エスペラント大会の書籍売場で、その瀟洒な造本、装丁、本が醸し出している静かなたたずまいに心惹かれて、たまたま購入したものである。

本書中の記述等によれば、作者はルーマニア生まれのハンガリー人。トランシルヴァニア地方の都市クルージュで25年にわたり人形劇団Puckで働きながら、エスペラント運動や著作に励んだ（エスペラントを学び始めたのは1956年だとのこと）。その後、2009年、80歳のときに、イタリア人のSen Rodin（1932～2020）と結婚し、イタリアに移り住んだ。彼は、“Bildoj pri Norda Lando kaj aliaj rakontoj”（Flandra Esperanto-Ligo, 2006）などの作品で知られるエスペラント作家である。

本書は126ページの薄い本で、多くは晩年に執筆されたと思われる50編の掌編が収録されている。個々の作品は、それぞれに作者の人生の一断面を切り取ったという趣がある。両親や兄弟や友人、隣人のこと、子どもたちの避暑の思い出、モンテッソーリ幼稚園や女子修道院に併設されたギムナジウムの思い出などが極めて平易な文体によってつづられている。そうして、それらを通して全体として、作者の人生がおのずと浮かび上がってくるように思われる。

作者はその長い人生で、多くの辛酸を舐めてきたのだろうが、この作品集からうかがえるのは、そうしたあまたの苦難を乗り越えた後の静かで落ち着いた、澄み切った心境である。彼女は敬虔なユニテリアンであった。老年に達して結婚した夫との仲は極めてむつまじいものだったようである（彼女は初婚、夫は再婚であった）。本書中で夫に向かって、最近はあまり見ない“Ci”を使ってしばしば呼びかけているのは印象的である。

私はコロナ禍で鬱屈した状況で本書を読み、大いに慰められた。ところが、その後、雑誌やネットを見て知ったのだが、作者と夫君とは新型コロナウイ

ルスに感染して、すでに 2020 年 3 月にピアチェンツアの病院で相次いで亡くなっていたのだった。高齢とはいえ、彼女の体力・知力は衰えず、しかし、90 歳を記念して刊行された本書を自身の最後の著書であるとして夫にささげ、そうしてその刊行からほどなくして夫婦で逝ったのである。ともに暮らした期間は長くなかったとはいえ、偕老同穴ということば（古めかしい表現だが）が思い浮かぶ。ひとは自らの死に方を選ぶことはできない。その死自体は偶然であるが、それでも見事な往生だという思いにとられる。ネットにはその人柄や生き方をしので、二人へのオマージュがたくさん掲載されている。

個々の作品は極めて平易なので、あれこれ批評するよりも実際に読んで味わっていただいたほうが良いと思うが、少しだけ紹介を試みたい。第二次世界大戦についてはあちこちで語られている。戦争の惨禍はコロナ禍にあえぐ現在とは比べものにならない。しかし、新型コロナウイルスの感染爆発を恐怖や不安とともに見つめている私たちの現状は、戦争の推移を恐怖とともに見つめていた当時の人々の置かれた状況と何ほどかは共通するのではないか、などと考えたりもする。死の恐怖に直面している点も共通する。もちろん、書かれていることのすべてが「事実」ではないにしても（彼女は、“La skribistino”で、作品の 90 パーセントは事実に基づくものだと書いている）、そこには作者が経てきた体験が色濃く反映されていることだろう。なかでも、戦時下の性暴力をつづった“*Igor*”は特異な作品である。

そのほかに印象に残った作品をいくつかあげておこう。作者は結婚するまでルーマニアで暮らした。社会主義体制の硬直性、滑稽さ、無意味さへの笑いをまぶした批判も語られている（“*La singratado*”など）。他方、“*Andu*”は、きわめてシンプルながら、人形劇団で出会った夫婦の悲劇を描いた切ない話である。あるいは“*La bluj floroj*”。幼いときに彼女は野原いっぱい咲き誇っていた青い花に心を奪われる。長じてから、それは彼女にとって“*animaj medikamentoj*”となり、悲しみ、不愉快な思い、重苦しい記憶にとらわれたとき、青い花を思い出すと心が静まるのだと語る。巻末に収録された“*La lasta letero*”も感動的だ。これは結婚 10 周年に夫にあてて書かれた手紙である。あとどれだけ共に生きられるかわからないが、ふたりの生活は、決して希望を失ってはいけないという良い例をすべての人に示しているのだ。そう彼女は述べている。

本書は、その平易な文体、シンプルな内容から学習会のテキストとしても好適ではないかと思う。彼女には本書を含め 11 冊の著書と、夫君との 2 冊の共著がある。なお、本書の版元である EXIT は、ルーマニアのクルージュ（クルージュ＝ナポカ）にある。

(La Movado2021年3月号掲載。なお、転載にあたって一部表現を改めた)

(追記)

名古屋エスペラントセンターの会員をメンバーとする読書会 Ni legu では、現在、Julian Modest “Dancanta kun ŝarkoj” をテキストにしているが、2022年春から、本書 “Júlia Sigmond 90” を取り上げる予定である。